

[学会] 第11回 千葉県門脈圧亢進症研究会

日時: 昭和62年11月19日(木)

会場: 千葉グランドホテル

世話人: 大藤正雄(千大・一内)

1. 食道静脈瘤を伴った門脈腫瘍塞栓合併肝細胞癌に対する治療

竜 崇正, 渡辺一男, 本田一郎
渡辺 敏, 炭田正俊, 中川宏治
佐野友昭, 藤田昌宏

(千葉県がんセンター)

中尾照雄, 永井米次郎

(八街病院・外科)

食道静脈瘤を合併した門脈腫瘍塞栓合併肝細胞癌は、容易に出血をきたしやすく、その予後は極めて不良である。われわれはかかる肝癌に対してまず肝障害をきたすことが少なく抗腫瘍効果の高いリピオドール、N-CWS懸濁液を肝動脈より動注して主腫瘍をコントロールし、かつ腫瘍塞栓に対し体外から50GyのRadiationを行なって治療している。そして、腫瘍塞栓のコントロールができた時点で内視鏡的に食道静脈瘤に対して硬化療法を行ない、これを消失せしめている。主腫瘍および腫瘍塞栓をコントロールしてはじめて、食道静脈瘤破裂の危険から回避でき、内視鏡的硬化療法の有用性が増すものと思われる。

2. V-V shuntが見られた肝外門脈閉塞症の1症例

田中武継, 吉川正治, 仲野敏彦
伊藤文憲, 大野孝則

(船橋中央・内科)

大久保春男 (同・病理)

肝門部を含めた肝外門脈の閉塞を有し門脈圧亢進をきたす肝外門脈閉塞症(EHPO)と、特発性門脈圧亢進症(IPH)は類似疾患として鑑別困難な症例も報告されている。今回われわれはEHPOにIPH類似のしだれ柳状、および静脈管吻合を示す症例を経験したので報告する。症例は36歳、女性。家族歴、既往歴に特記事項なし。心窩部痛にて当科受診。腹部超音波検査にて門脈域に小管状の脈管の集合を認め入院。血管造影にて門脈の閉塞と求肝性側副血行路の発達があり、腹腔鏡にて側

副血行路の著明な発達が見られ、肝静脈造影像にてIPH類似のしだれ柳状、および肝静脈間相互吻合を呈していた。

3. 門脈左枝より血行をうけた食道静脈瘤の1症例

有田 洋右, 常富重幸, 野口武英
木村八重子, 大野孝則

(船橋中央・内科)

大久保春男

(同・病理)

胃食道静脈瘤は門脈圧亢進症にしばしば合併する、重要な側副血行路であるが、それを形成する静脈は、左胃静脈・短胃静脈などが大部分を占める。今回われわれは、比較的稀とされる、門脈左枝より発し胃食道静脈瘤へ至るport-coronary anastomosisの経路を、超音波PTPおよび剖検にて確認し得たので報告する。

4. 敗血症に門脈血栓症を合併した1例

市川 忠, 塩谷雄二, 北 和男
中村広志, 浅田 学

(旭中央・内科)

七條祐治 (同・放射線科)

症例は20歳、女性。腹痛と発熱が1週間続き来院した。入院時、腹部USにて門脈本幹および右枝に血栓を認め、血液培養でGPCを検出したため、敗血症および門脈血栓症と診断した。ヘパリン、FOY、抗生物質による治療で第3週にて軽快。第4週には症状の再認を、血培よりカンジダを検出したが、抗真菌剤の併用にて第8週にて軽快。現在外来経過観察中である。本症例では、門脈血栓の形成、cavernous transformationと考えられる側副血行路の形成、血栓の退縮および門脈の開在と側副血行路の残存という。経時的なUS上の変化をとらえることができ、現在までの報告にも経時的変化は著述が少なく、貴重な症例と考えられたので報告した。